

昔むかし、ある海辺の小屋に、まずしいおじいさんとおばあさんが住んでいました。おじいさんは、毎日浜に出て、魚をつつてくらしを立てていました。

ある日のこと、おじいさんは、いつものように朝早くからつり糸をたれていましたが、魚はいっぱきもつれませんでした。あきらめて帰ろうとして、最後にもういちどだけ糸をおろしました。するとしばらくして、たいそう重いものがかかりました。やつのことで糸をおおあげてみると、とてつもなく大きな鯉がかかっていました。

鯉は、命ばかりは助けてくださいというように、なみだをほろほろこぼしました。おじいさんは、

(これはただの鯉ではないぞ。きつと神さまにちがいない)と思って、鯉をそのまま海に放してやりました。鯉は、なんどもおじいさんのほうをふり返りながら、海の底へ消えていきました。

あくる日、おじいさんがきのうと同じところで魚をつっていると、ひとりの若者が近づいてきて、ていねいにおじぎをしていました。

「私は、竜王の使いの者です。竜王の命令であなたを龍宮にむかえにきました。きのうあなたが助けてくださったのは竜王の息子です」

おじいさんは、若者について行くことにしました。若者が海に向って呪文をとなえると、海はまっぶたつにわれて、大きな道があらわれました。歩いていくと龍宮につきました。

竜王がおおよろこびで出むかえました。毎日、大宴会が開かれ、おじいさんは、時のたつのもわすれてしまいました。

けれどもしばらくすると、おじいさんは、家にのこしてきたおばあさんのことを思いだして、帰りたくてたまらなくなりました。そこで、竜王はしかたなくおじいさんを帰らせることにしました。

すると、竜王の息子が、こっそりおじいさんにいいました。

「おわかれのとき、父はあなたにおくり物をするでしょう。何がほしいかときかれたら、ほかのものはいらぬから、玉手箱にしまつてある玉をくれといつてください。その玉は、ほしいものをいえばなんでも出してくれる魔法の玉です」

おじいさんがわかれをつけると、竜王は、

「おくり物をしたいが、何かほしいものはないか」と、たずねました。おじいさんは、

「では、竜王さまの玉手箱にしまつてある玉をください」といいました。竜王は、

「いや、こればかりはどうしてもやるわけにはいかない」と断りました。すると竜王の息子が、

「おとうさん、このかたは、私の命を助けてくださったのですよ。子どもの命と玉とどちらがたいせつですか。どうか、おじいさんにその玉をあげてください」といいました。そこで、竜王は、しかたなく、おじいさんに玉をくれました。

おじいさんが家に帰ってみると、おばあさんは、目の玉がぬけでるほど一生けんめいにおじいさんの帰りを待っていました。そして、おじいさんから龍王の玉の話を聞くと、よろこんで、

「おじいさん、じゃあ、りっぱな家を出してもらいましょよ」といいました。そして、玉に向かつて、「りっぱな家を出しておくれ」といつてみました。すると、たちまち小屋が消えて、ふたりは、りっぱなかわら屋根の家の中にすわっていました。

それからお金を出し、お米を出し、倉を出して、ふたりは大金持ちになりました。

さて、川向こうの村に悪いばあさんが住んでいました。ばあさんは龍王の玉の話を聞きつけて、物売りに化けておじいさんのうちにやってきました。おじいさんは留守で、おばあさんがひとりで留守番をしていました。物売りのばあさんは、にせ物の玉を出してみせて、

「玉はいらんかね。このうちには龍王の玉があるそうだが、これも天下にふたつとないいい玉だよ。出してきたくらべてごらん」といいました。おばあさんはことわりましたが、あんまりしつこくいわれて、とうとう龍王の玉を出してきて見せました。物売りのばあさんは、龍王の玉を手にとつて、

「ほう、これはみごとな玉だねえ」といつて、ほめていましたが、おばあさんがふとよそを向いたすきに、にせ物の玉と取りかえてしまいました。そして、本物の玉を持って帰っていきました。

物売りのばあさんが家から出たとたん、りっぱな家はたちまち消えうせ、おばあさんはもとの小さな小屋の中にすわっていました。おばあさんはおどろいて物売りをさがしましたが、かげも形もありませんでした。そこへおじいさんが帰ってきました。おじいさんもびっくりしました。それからというもの、ふたりは泣いてばかりいました。

ところで、おじいさんとおばあさんは、いぬとねこを飼っていて、わが子のようにかわいがっていました。にひきは、おじいさんとおばあさんのために竜王の玉を取り返そうと相談しました。

そして、ある日のこと、わたし船に乗って川を渡り、向こうの村に行きました。すると、今までなかった、りっぱなかわら屋根の家がありました。調べてみると、その家の主人はあの物売りのばあさんでした。そこで、まず、ねこがばあさんの部屋に入つてさがしましたが、玉をかくしていそうな場所は見つかりません。最後に、そつとおじいれの戸を開けようとすると、ばあさんが、あわててねこの首をつかんで外へ放りだしました。

（ははあん、玉はあのおじいれの中だな）と、ねこは思いましたが、どうやってぬすみだせばいいかわかりませんでした。

そのうち、夜になると、にひきはおなかがすいてたまらなくなりました。そこで、ねこは、なにか食べ物を見つけようと、ばあさんの家の倉にしのびこみました。倉のなかでは、王さまねずみをまんやかに、何千というねずみたちが、飲めや歌えの大宴会をしていました。

ねこは、いきなり王さまねずみにとびかかってつかまえると、ねずみたちに向かっています。

「ばあさんの部屋のおいれに竜王の玉がしまっているから、とってこい。さもないとおまえたちの王さまを食ってしまうぞ」

ねずみたちは、

「ああ、そんなことならわけはない」といって、「やい、キリバ、やいノコバ。おまえたちが取ってこい」と、にひきのねずみにいつけました。キリバとノコバは、ばあさんの部屋のうらに行き、キリバがかべにあなをあげ、ノコバがあなを切りひろげて、まんまと竜王の玉をぬすみだしてきました。ねこは、玉を受けると、いぬのところにもどって、つれだっておじいさんの家に向かいました。

川のわたし場までもどってくると、まだ朝早かったので、船には船頭が乗っていませんでした。そこで、いぬが泳いで川をわたることにしました。ねこは玉をくわえて、いぬのせなかに乗りました。川のまんなかまで来たとき、いぬは急に心配になって、

「おい、ちゃんと玉を持つてるかい」と、ねこにたずねました。けれどもねこは玉を口にくわえているので返事ができません。いぬはなんどもたずねましたが、なんどたずねても返事がありません。とうとういぬははらを立てて、

「おい、どうして返事をしないんだ」とどなりました。ねこは、つい、

「持つてるよ」といってしまいました。そのとたん、玉は、ねこの口から水の中に落ちてしまいました。

岸につくと、いぬは、はずかしくてこそそこそ家に帰ってしまいました。でも、ねこは、なにかよい方法はないかと考えました。けれども、なにも思いつきません。そのうちおなかがすいてたまらなくなりました。すると、向こうのほうで漁師たちが、大きな死んだ魚をすてていました。ねこはさっそくかけていって、魚のおなかにかじりつきました。すると、大きな石ころが歯に引っかかりました。はき出してみると、それは石ころではなくて、龍王の玉でした。

ねこは大喜びで玉を持って帰り、おじいさんとおばあさんは、また大金持ちになりました。

おじいさんはねこに、

「おまえは最後まで力をつくしてくれたから、これからは、いつでも部屋にあらがっていいし、すきなものを食べさせてやるよ」といいました。そして、いぬには、

「おまえは、これからは、庭のすみや縁の下でくらすんだ。食べ物は魚のほねだけだよ」といいました。

それからというもの、いぬはねこをうらむようになりました。それで、今でも、いぬとねこは、顔を合わせるたびにけんかをするのだそうです

村上郁再話

資料『朝鮮民譚集』孫晋泰